水府志料

久慈郡下

巻之九

和書門 類
二二六七九號
一七一函
一七架
一六冊

内閣文庫
和書類
二二六七九號
一一六冊
一七四函
一二架

内閣文庫
番號 和 22679
冊數 73 (9)
函號 174 325

内 一〇九二六號

国立公文書館
National Archives of Japan

駿河志料巻之九　久能郡十一

大里[illegible]　庵原郡[illegible]

[illegible]

[illegible]

谷　二十九ヶ村

[illegible]

小　野　[illegible]　大　間　[illegible]　森　木

大　平　[illegible]

[illegible]　上　新　地　下　[illegible]　川　島

[illegible]

巻之九

巻之九
鹿河原　上新地　下新地　川島　小島
島　栗原　下川合　春友　常福寺
星野宮　西宮　三才　磯部　谷河原
大門　大平　増井　瑞龍　沢山
小野　馬場　太田　新宿　稲木
天神林　赤土　棚谷　千手
合二拾九村

水府志料巻之九　久慈郡下

大里組

鹿河原村　戸百一　水戸迄五里下

村名ゆゑんハ鹿也河原とよせしより　正保二酉年　今の名に改む
旧村名の地狭にして寛永の頃まで僅に戸有るといへり　今ハ村民
ふゑることなし　其質ハ落房村これを作す　其地東北ハ落房に
接し西ハ久慈川にて那珂郡下根本に境ひ南ハ上河代
村に南北二十丁余　東西二丁三十五間　行程二里

太里組

上河代村　戸凡六十二　水戸迄五里

此村東ハ山有り　西ハ久慈川有りて那珂郡上岩瀬　下岩瀬　下根本に
境ひ南ハ川合に隣し　東ハ川有　落房村北も又落房乃鹿
河原村ニ有り　南北十四丁　余東西十丁　行程二里

內　一〇九二六號

大里組　下河辺村　戸凡三十六　水戸迄五里

此村西ハ久慈川を隔て那珂郡下岩瀬に堺ひ南ハ川崎にはつゝき
東北も川崎なり南北六丁ほと東西八丁ほとあり　上下河辺
村ハ共に下岩瀬村より分りしと戸俵ともに未詳

川島村　戸凡五十七　水戸迄五里

此村北ハ山なり　西ハ久慈川を帯ひ東ハ宮川流れ中にて落
川なり　北ハ川崎の旅河原　東大里に堺ひ北ハ薬谷荒房
村南ハ上河辺下河辺岩瀬　那珂郡　何連に堺ふ久慈川
を以て定め南も又岩瀬なれハ中山村に堺ひて南北三十丁ほ
と東西十八丁ほとあり

おなこわし山　昔戸の堺より佐竹氏ノ臣某
兵衛此所ニ住みて多くの者をつれ　那珂郡に居たる佐竹氏と川辺
に陣して合戦す又佐竹氏を攻めんとせしに討死の者ありて是を哀れと
思ふ故に伐採或ハ焼殺して西念坊へ避難せしにより其
時此人を殺すもの无くして坂入女殺して居住せしとといふ也
山上に岩穴あり口甚狭く中に入れは方三間余あり其戸を
堀せるものありといふ

大宮組　小野村　戸凡百口　水戸迄八里

此村南ハ久慈川を限りて那珂郡磯崎門部に向ひ東ハ長谷村
に隣り北ハ山田川を限りて薙原村に隣り西ハ中野村なり

南北十八丁間有之東西八丁峠八間有之

古文書　野志田又兵衛と申者所持信田氏野志田若狭守と称し天文年中佐竹氏に仕へ吾子式部少輔と共に天正十九年野州壬生城攻の時一手の将軍將たりとて備前とはこれの感状を後田の内に貯へ文の状をかくして慶長年中佐竹氏秋田に移るの時浪人となり

に元禄二己年水戸家江差出せしと云今に伝ふ

水戸黄門公観楓の作文同人家に在り

詠小嶌楓葉

佳節到一小舎。遠含楓葉能霜。仙人練丹鉛薬。青女遅臙脂粧。吹起火焼林上。寸断錦曬夕陽。夜易明天雖暮。紅繼晷短日長。

前田之四五兵衛

下知候付印状

以右候者急度一

中之也

天正九年
七月六日　（花押）

鴨志田武蔵守殿

大里組　嶋村　戸九九十一　水戸近五里

此村和名山河ノ西ハ小宮ヶ作村ニ隣リ南ハ粟原村ニ隣リ那珂郡ニ
隣リ東ハ久慈川を以て境東ハ山川会北ハ山田川河ヲ以て境
を隔ツ東西十九丁十九間南北十一町五十九間程と
河ヲ傳名抄志節に見ゆる也

梵天山　真言宗宝金剛院と云ふ寺有り此山より昔は中の寺ニ
の名に称しけると云ふ今は名付け此山名の別名
たり一名合宿山とも云ふ又淨山ともいふ名を合せ侍るもの有る
時ハ必ず雅致する事と云ふ故ニ此里人名を合せ侍る名なし又女
の登るをとめるなり

百穴　冨士山滝といふ小名アリ夜叉林の北西面ニ岩穴多アリ　其数凡
九ツアリ昔ハ四五十ケ所アリといふ土人百穴と呼此山ニむかし冨士浅間
の石宮を安置せしか冨士山と唱ふ其穴ハ大なるものハ入口
三尺内にいれは四五尺横五六尺ばかりなり　又大なるものハ
入口四尺内ニ入れは凡二間横七八尺ばかりなり　里俗此所ニ上古
大雨ノ時住せしものありといふ何之穴居の蹟にや

大里郡　冨田村　戸凡三十八　江戸より近十五里余

此村西南に荒川ありて西ハ那珂郡門ア村南ハ同郡須
田村に接し東ハ山田川ありて上川合村に隣り北ハ沼村に至る
東西九丁十間ばかり南北五丁十五間ばかりあり　中地五畝余

三ツ木の辺ハ今其子孫あり彼の家の相承れ辺にあり

大里郡　下川合村　戸凡九十六　江戸より近十六里余

此村西ハ上川合村にはなれ南ハ荒川ありて那珂郡須田村に接し
以東に星川ありて広瀬村并漆田北ハ谷ケ谷村に隣り東西十
五丁ばかり南北六町二十間ばかり有　北方より相通の往来の道

大里郡　春野村　戸凡七十一　江戸より近十五里

此村東ハ山ありて西ハ荒川ありて南ハ広瀬村帯　東ハ村境
広瀬村北ハ西方田村にして星川ありて村中を流る東西七町
四十間ばかり南北五丁二十間ばかりあり北方より相通への往還
御座あり

大里組　常福寺村　戸凡七十 水戸より三里

むかし常福寺と云ふ寺ありて村名とし今の瓜連常福
寺是なり　此村西は山にて大門村に続き南は瑞龍中
郷東は里川ありて白羽西宮村と界ひ北は菅又西河内下村に界ふ
東西十一丁余十間ほと南北十二丁二十八間ほとあり水戸より地今
への往還に為ありて高岡萬帳より此里常福寺にとかよふ
常村谷夜此名是なり

古蹟

三田枚といへる地あり天正十九年辛卯二月佐竹氏
南方三十三館を滅し時鹿島郡鎌田の館主石川某
平通幹若狭五郎と其四にありしか佐竹義宣の謀によりて

て其日族皆殺害されしと或は石沢慶長中南宮沢と云ふ 今存在南宮沢是なり といへ
る鎌倉の宅にかくれしか遂に同月九日立退き三人自殺して
死にけり此地に埋め墓印として松を植ありといへり今
の字松なし　又一説に此三人を石沢村にて石田へ葬せし
ともいひ又中居彼等外に不浮か名の地を名
より墓へしともいへり

大里組　里野宮村　戸凡四十七 水戸より六里

此村西は山にて北は常福寺村に続き西は瑞龍中郷村南は西宮
東は里川ありて白羽村と界ひ東西十五丁四間ほと南北十二
丁ほとありて水戸より地今への往還に為ありて此地にて此川

を堰けり中四十間三丈余里見宮小池下より堀ア 其内三丈余ハ西宮 田成
北田方用水とん

薩都郷 按風土記に薩都里古有国栖名曰土雲爰兎上命発兵誅
滅時能令殺福哉所言因名佐都とみへし 読しくハ世に記すへく
し後に八覚と都とも称し 又里川東西に地を分て西都
東都と申せしと見えたり 東鑒文治三年十月二十九日の
条に常陸国鹿島社毎月御膳料常陸奥郡と記す内に佐都東
十四石佐都西九石八斗と記す 府中税所氏文書弘安二年作
田勘文奥郡と記す内に佐都東二百八十九丁八反三百歩
東岡 西岡 根本 大森 泉 今泉 千根 沢田 小沢 佐都西二百

五十六丁三反小野 除中小野 内阿久津 小野 西河内 吉津 磯部 石
神 篠田 東河内 饗田 太田 白岩ともいふ地名見えたり 又奥法
五年奥郡切ふるといふ事ハ佐都東 上小沢二十丁 同西郡
石神十四丁とも記す 明徳二年北文も見に同し 増井村正
宗寺旧記康安二年正月佐竹義篤より其子義衡に譲状
に八常陸国佐都西郡内 太田内と記す 又同書に佐都西郡太
田郷増井村勝楽寺ハ延長年中 創建とも見えたり 佐竹家中
文書目録にハ応永二十五年十二月廿日足利左兵衛督持氏の判
常陸佐都大宮注内完戸孫四郎入道と記す 又正長二年四月
廿七日判不知姓名にハ佐都庄岡田庄内 箱坂五郎 孫同安芸守等

入道浄久といふ 永長七年 正月廿日佐竹右京大夫義人到よハ常
陸國佐都西郡小野一方小野崎越前三郎と戦ひ其地東西幅員
明ならず 又何年廃置せしや未詳といへとも山の流書ニ見えし
たるにて今の里川ニ西ニ流れ革ハ推て知るへきなり

冷水川 往還人家より東一丁余ニあり 今ハ田となり冷水川の名
のみ残れり

赤沼 冷水川より巽の方三丁余西北増子氏ゆかりある屋敷
のうしろにあり 昔佐竹氏南方領館主を滅されし時鹿
島郡中居村の館主中居式部太夫秀幹を追手来り戦ひ
し時 佐竹勢此水との沼に少し休しけるに溺れ今なほつと
ふちの秀幹と討れ其屍を此沼へ放込し 其池水血と染めしかば
赤沼と名付けり 天正六年の洪水に里川の流れ深て其沼埋りし
に今里川の流れとなる 其後秀幹の霊今なほつきまとふ崇をな
せしにより依て屍骸の内に小社を立て秀幹を祭り今に至
て祭る九月十九日祭日なり 又中居村の伝説に須里今なほつと
いふものあり 秀幹の家臣なる 天正十九年辛卯二月八日此村
にて秀幹と殺害の時 咽かわき渇し働き水を飲かし休し
ぬと佐竹勢討ち 依て里中二女と右田との間に伝わりける和色
なり後人其所に松を植へしと書説を伝ふ あやまりしにや

大里組
西宮村 戸凡八十 水戸迄五里廿二丁

鹿名 坂村宝暦十年辰の夏改写 西宮と居付 西ハ石田馬場 此里
小路のき南ニ 三才ニ 東ハ里川有りて 田渡長谷嶋に境ハ村ハ里の
当村より南北二十町 二十間余 東西四丁 ほと有り

刀脇沢 川谷甚左衛門 別利と云ふもの有り 紋ハ兎 頭ハ鶏中 江別房
より 此傍を家作 江戸殿の馬場に住し 兎をきとふ武
時 水戸義公へ献せし事有り しかもよって召抱られ 三才村に
住せし人 三才別利と云ふ 今此村に住し 其子孫とも此
水戸府下今に技おるとなん

大里郷
三才村 戸凡七十五 水戸へ近五里

此村東ハ里川有りて 此大嶋村に堺ス 南ハ磯部村に隣り 西ハ

右田村ハ西宮村より南北十三丁半余 東西五十丁三十二間程
と伝り

古文書 江間氏及今宿家蔵す 其先江間對馬守重氏
と申せし也 此外も尾張荒俣義重の書有りしといふ
今ハなし 其子孫五郎 里居後右近と称す 此時
尉よりの證書有りしと云ふ 此も今ハ焼失た

茲ニ為使者渡邉権兵衛
御名武勇静謐之上於干
伎國相當之地一所可遣之
畢竟義重無二依入魂

以招馳走之為専要者也

仍如件

永禄十三年庚午

三月十六日 信玄（花押）

沼石村る殿

大里郡 磯部村 此戸凡五十八 堂

いにしへハ五千騎と云せしと云説も有り此村ヲ岸山といへる山有り

むかしハ箕山と云しよし 農家之同ス村の北山の箕北

なりしかよつて箕輪とす此地ハ武田氏要害の地にして

士卒二千五騎を置しとなり 又此箕山に築き[illegible]

いへる字の地あり 此地にも 二千五騎を置けり 今に五千騎と

て字ありしと 此所五千騎と云しと今磯部とある

と云今此山ヲ還て康寿の五社を安置し此村の総守とす

此近くに橋本郷と云て邸跡といへる字あり 又星川を隔て

内田の地に大内郷とも云る所いにしへハ星川の辺村より

大椋川ハ流レトシテ二所ニ別レ其一ツハ此村ノ内ヲ流レ
内田飯部ハ鍋ノ化アリ紫和ニ羽茂ノ字多ク残ルト云
是ハ古キ佐竹ノ家臣ニ居住ノ地ナリトイフ 此村西
ハ稲木ニ隣レリ 南ハ谷河原ニ村ニ隣リ 東ハ小流ヲ以テ内反
村ニ隣ル 北ハ三戸古内村ニ至 東西十二町二十八間ほと南
北九丁十二間ほとあり 水アリ 旭分への他還ニ節あり

大里組 谷河原村 戸凡百十三 水八丘五里

此村東ハ黒川ヲ以テ内田藤谷ト隣ル 北ハ稲木天神林郷ニ
隣レリ 西ハ岩田村 南ハ五川合下川合ア 南北二十丁程と云
西八丁ほとあり 水アリ 旭分への他来往あり

大里組 太田村 戸凡百二十八 水八丘里三十丁

此村四面ニ山あり 東ハ西河内中 西河内下 町田 常福寺 沢山 小野
村ニ隣レリ 北ハ西河内上 西ハ町田 和久 安 松平 和田 芦間ニ
隣 南ハ太平 増井村あり 東西三十五丁四十間ほと 南北一里
三十四丁五十間ほとあり

古墳 日野彩秋墓あり 椴平といふ地ニあり 古昔日野某といへる
秋ある者ハ二この里ニ蟄居し北面の侍なり 此村ニあり 常ニ修造をなし
一日信親卿来り宿をもとめニ此家ニ頼ミ 秋純有りて病しきを与ふ
秋ハ信ニ害せん 手を取れ 彼ハ禅はゆ 久しと云ふ 信親卿日暮
行方を知らず 此事を以テ門下の居を抱えしてはなれとなり

那須野に来り果して是を害し衣裳を奪んとしけるを
以てかりしに桔梗と見えて動くを見て然るに那須
発心剃髪して玄翁の弟子と成て入西坊と改
む　是川今村大門村両村廃寺の祖なり今与一向専念二
十四輩巡礼の為来れる所彼の墓を拝して又其を
那須野か地にて是那須に在るとなるへし

古館　備前といふ地の旧館佐竹氏要害なり今村和田なりし也にか
りといふ書にも其本を中川因幡守といふものの古所なりける
いつの日村観霊院過去帳に書う中川因幡守里道化縁二
世安楽之和上と天正十三年乙酉仲春といへる人とみえたり

又按関八州古戦録永禄十年丁卯春佐竹義重の陣代助川
因幡守等那須資胤と烏山にて戦ひし事有て其人なり

鶏足山
協の内より五十余丁十九丁余と云里程有し　奥州岩
此山は是迄宿陣せし村なり山なりといへとも古今に見える
々是を云しかりて鶏足山と名付けしとよし　又奥州
岩城山より陣せし其時は再ひ鶏を見出し其名付けりと
いふ里俗の説のかくなれを見え其山と名付しを後に鶏足山
となししかれとも此山に登りて南を見れは数十里の
五一山なし又巴波川以南河内那須以北に畫く目中にある所名

得しとも云（国志の説）又河人の説には佐竹氏の石田の陣を此下に置たるにて其頃此山を居住しともいへり いつれか是なるをしらす 此山は常福寺と寺号付にもあるは連なる山なり山下に井戸ありと云る地あり 或説に佐竹中務大輔義宣陣の時なりと云ふて穿ちし水なりともいへり 又井と称し跡あり今も此くあり

菖根木 此村山中にあり草木に交りて在り **血河原** 茨巻 防己 紙姜女根 牛皮 厚朴 車前子 香薷 蛇床子 前根の外近辺山沢田地にあり

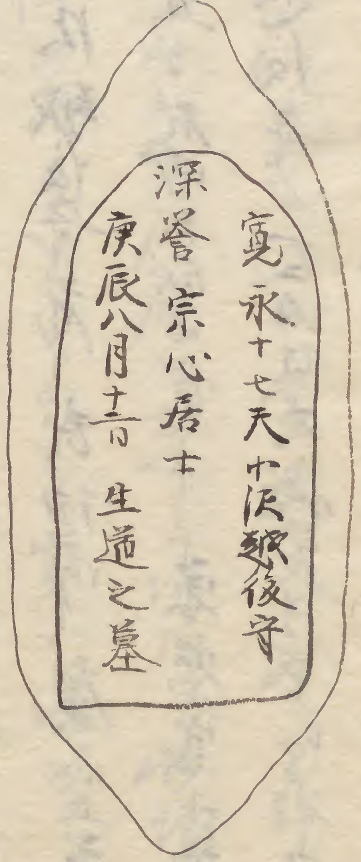
大平村 大里化 戸凡三十軒 水戸迄三里

應石大平 柳沢と号せしより 四面皆山なり 東は坊井 新宿村に隣る 北は大門 並迄村 西は久米 玉造 南は大里村なり 東西十六丁 南北十丁ほどある里

古文書

小沢氏 伊十郎なる者の祖は其先藤原氏 小澤に相住て代々居住す 小沢を称す 後佐竹氏の幕下に属す 小沢越後守広 武功あり 慶長五庚子年 佐竹石田三成と義宣も石田三成に党し 東照宮に敵し すでんとせし時 越後守は一二万の大将たりといふ 同七年五年 六月十一日 佐竹義宣秋田へ移られしにおいて 越後守 暇を乞ひ常州に出り 大平に住居せしと 此浦に居らくれ 越後塚といへる

かの寺に行て水戸殿立林の地にて其碑かくのことしされ
そはまさに道のしるへ墓となんいふとそ



男兒十五人蜀士
条情似路躡仲翁
遠根楊葡下中生
月玉縄取自長元

為其如此申置者也

仍如件

寛政十年 徳風（花押）

金瀬

陰涼

其國以後志摩守當國

并ニ於味方中様合之

儀之有之ニ於ハ万一彼是

遺恨之子細在之付

被成速ニ築嶋之為

違犯之者其沙汰可遂之

仍如件

天正二年甲戌

卯月九日　氏繁（花押）

小澤左衛門尉殿

奉公之由之

限以後者

也

元和四年戊
七月廿三日 御判
小浜城ほうミの
武田か入部ふる拾定
拾銭し申 役後
可まく 状
如件

壬辰年
七月十八日
乙丑

壹
近加陰無なりえ
候之上
弐疋麻毛之馬廐仁
被相立之条感悦
向後尚知行之内

小澤方より売荷物十駄
其方相違有之仍
一札如件
天正
霜月十五日豊徳（花押）

大字作　境井村　戸凡五十九　水戸迄壹里

此村東西ハ山あり、西ハ大平村并宿村に続き南ハ野宿寺塙村
東ハ下備中迄和ハ不迄太門村あり南和七丁九間ほと東西十丁ほ
とあり　正宗寺旧記ニ佐都西郡石田郷境井村とみへたり
佐竹秀義墓　按正宗寺旧記ニ嘉禄元年十二月十八日秀義於保
倉逝去同二十二日常州下着同廿四日於正法院於廟所送葬
七十五歳とあり　今其所と知らて正宗寺於後ニ佐竹氏代々の五輪
石と云伝ふる物あり　其くハ見ゆるへし
那珂兵部卿通辰自害所　一本松と云ふ岸にあり　建武二年乙亥六
月北畠権中納言顕家父卿西郡三筒原ニて佐竹上総介貞義

と戦ひ已と破られ兵庫に走る大和河内紀伊通辰忠戦ふ
其天子より菊桐の紋を賜ふ同三年丙子二月六日楠正成子息
貞義及高土佐守師秋と金剛山に戦ひ利あらずして桜井にて一本松
の辺にて一族四十三人自害或は二十四人ともいふ金剛山の傍辺に
葬りし上宮河内の条并びに（ ）桜正宗寺私記の舊記に古
文書の写あり子息五郎義光軍忠の事
右義武去年七月廿四日武州国鎮之合戦之時致討死至覚
去今年二月六日常陸国久慈西郡瓜連楠木判官正成代として
其時防戦死亡之段尤以感忠之恩賞可追而有子河内之状如件
建武三年九月廿八日 師則

楠正家の事跡

右文に正成代とあるは正家常陸に来りし事にて何とある
乃太平記にも見えず今考ふべし

大里郷 瑞龍村 戸凡四十九 水戸迄六里

村名舊隠也に作る寛文中水戸義公此田万千代君の墓を修せら
れし時白蛇をみたる事ありしにより其後延宝七未年改
て瑞竜とは号せらるとあり百姓共の家に此蛇骨と
称せしを蔵して今に伝ふ事なし 此村西ハ次山宗に隣る
南ハ小野東ハ里野宮和ハ常福寺村なり 南十六丁六十六間など
東西十丁六間などあり

瑞龍山　義公家国之山水戸義代々墓所なり　儒士殉死せしものも
人もきえなき外役人八人なり掃除の為下に三人あり
古墳　和尚塚山といふ地にあり水戸義公林の内に一つの塚
あり　むかし法師ありて入定せし所也といへり何等の僧なりや知る
人なし
小町墓　身のかくし山といふ地にありこの近所塚之上に五輪の石
塔あり文字なき由なり　譜樒寺に近し　往古樒寺ハ水戸
義公頼義義家父子の罪位を安んぜられし所なり古跡
の樒枝なを盛へ吾花實のとしよりて譜樒寺といふ古人傳
ふ一日義公此地の花を見玉ふ時二八の美女来り短冊を枝

に結ひつけ去る是を見れば和歌なり義公その和歌を御覧ありて
其跡を慕はせらるれど彼の美女見へずなりにける方を
知らせ給はず此里に古墳あり里人に問はせ玉ふに小町の墓なりとて
其後彼の地を身隠し山と名付といふ吾妻鏡しといへ
ども土人の伝ふる事くの如し或人の云古昔小町と
いへる女老人になりては高野大師の弟子になり常陸国玉造の荘
の女の小町なりと此地玉造村と云ふる事僅か一里小町の墓といふ
ものと証へりて是は実に女の小町なりと云ふべし
朱之瑜墓　瑞龍山の麓にあり之瑜舜水と号す明人なり明居の
乱を避て帰化す水戸義公召して学問に従ふして此に

に葬る祥両ハ岩名自ら明徴君子朱子巻と號せしよし

大里郡 沢山村 戸凡十九 水戸へ近六里

此村東西ハ三方ニ山阻り 東ハ塙龍村ニ隣りき 南ハ小野村北ハ常福寺西ハ大門村等ニ至西十五丁南北二十三丁斗と称里城

村皆新山寺領なり

大里郡 小野村 戸凡百十九 水戸へ近六里

此村西ニ山阻り西ハ塙井大門ニ隣りき 南ハ丁隣村東ハ西主小八塙龍村あり 南十三丁五十間余ゟ東西十丁二十六間斗と

阻る水戸より松倉への通路なり

古舘 小池岸といふ地ニ阻り むかし佐竹氏旗下の侍小野蔵

云しものゝ居所なりと里老の説あり 按ずるに佐竹義仁の第六子義森小野を名乗る佐竹を称す此人の居所なるべし

古舘 小野塙といふ地ニ阻り むかし小野崎氏の居所なりといへり 里老の説なり

古舘 今宮山といふ地に阻り 今白塙明神の小社を安置す 佐竹氏の家臣今宮大学といふ者の城なり 佐竹氏滅亡のとき此地の内に安置せしより 佐竹氏羽州に移る時今宮氏も之に移り 其跡を此村の鎮守となし 祭を専らとせしといふ 又一説に長谷村密蔵院先祖ハ岩崎にして小野崎氏の後也 塙將監盛と号し天児屋根の命より大織冠鎌足の

證と建相如して白猪の御沖と宗我氏沖とは神別なる文より
小池宿氏を名のり 竹村に居住すといへり 是なれは古館
三ヶ所ともに一人の居所なるや明ならず 考を記す
七井 北井 瀧井 瀧のもとといふ 此所にあり 照井 明月の井 今名のみ存す 岩井 桃原井
向井 向井とも 此所にあり 腹ヶ井 清水 今名のみ存 皆涸 此泉ありて里人毛を
同也早うも 水乏しくなりといへり
行人塚 優の塚なり むかし此塚より極大なる しゃもきありしか文
昔中廣澤山耕山寺の僧が持せし後なきかりしと里俗の説
なり ここに耕山寺の跡猶も不見 不定
岩窟 寺伴と云地にあり 阿弥陀の像を岩に彫付てあり 仏法

大師の作なりといへり 近比の説人多く信る時は必ず岩窟
其なりと云り
矢大臣塚 里俗の説に孝謙の良嗣皇都より退き来りし時矢
大臣此所に来りしか此所にて見失ひし所に瑞龍に見か
ひし山なりといふなり 矢大臣自害せし地を矢大臣森と
いふ 今大臣の小社あり 又良子村に甲を割てあり 良嗣甲を投し
所といふ 皆未詳
大里組 馬場村 戸凡七十 北戸近六里
本村東は西二丁に並ぶ 北八小池 西八新宿坊井 南八大向村
南北十一丁十五間 東西二十九丁にて 北戸より 枇杷ヶ入の

紐還ん爲なり

古文書　中村氏并江戸象記等　又安政年江戸家元河
よりに往の也人ありて不称せしやと知ること出雑に于
度の旅發ありて即方同遅滯を記し出人足を馬借出處と
年に江戸より秘密切符を授け本當に例し其を守る

勾玉（マガ）　貞享五年　稲荷塚より掘出し于其義命して
右國運花寺の寺宝と成

安置して
二段下にて收
終也

当月まへ畑
作村田地え之の

度逢年
ニは極り候
や

永禄三年素秋吉辰
義堅
中村組右衛門殿

右加五十七ヶ条秘書しは
不残もの傳ハりり七めん
中村組右衛門との

八分口

一、千三石　六文以也三拝借

甚し候

右御年貢也未皆済仕候

中村四郎兵衛

極脇〻

年

手代何兵衛

ろ也

天保十三年

寅三月吉日

中村周蔵

義重キ中途ニ付

右之段々当御役所ニ御

御尋取調願揚候ニ

専利末之背候ニ付

候ハゝ以上ニ申合

謹し

長崎役所來一様

尚先立而手紙差出候
處返答以来様相候
哉御申聞候ニ付委細
若一下積以證拠相済
右承候一二非之事
恐惶謹言

三猿云々御座候
三月十
左衛門

家綱（花押）

伊
陸奥守

今度上刕表之女
利根河之流末抜
実以如望満足
然者様子付而先以
法眼元光被悦
併令人之大

兼之應調役銃中
歎蚊子人ニ討掛ル
也しハ時ヲ以來矣
江湖陣ハ圍ミ及
大風ニ吾了箭推
彼者十遣又走遅ニ

条先ハ節力トハ立
十二月吉日
右儀寫之

右御礼状　義信

御祝儀申入候

[illegible]

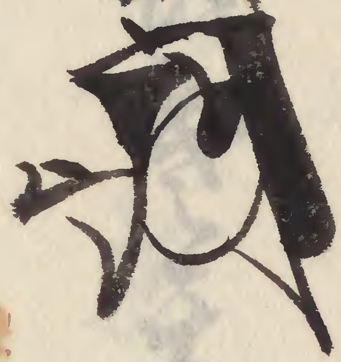
[illegible]

[illegible]

[illegible]

謹言

修理亮

家綱 

内膳殿

一加賀國石坂城端村百姓
之田畠下人淺野屋与兵衛
與兵衛家動理無之候
一右衛門之田地之事同中

拾壱戌とし
三月
吉日
作兵

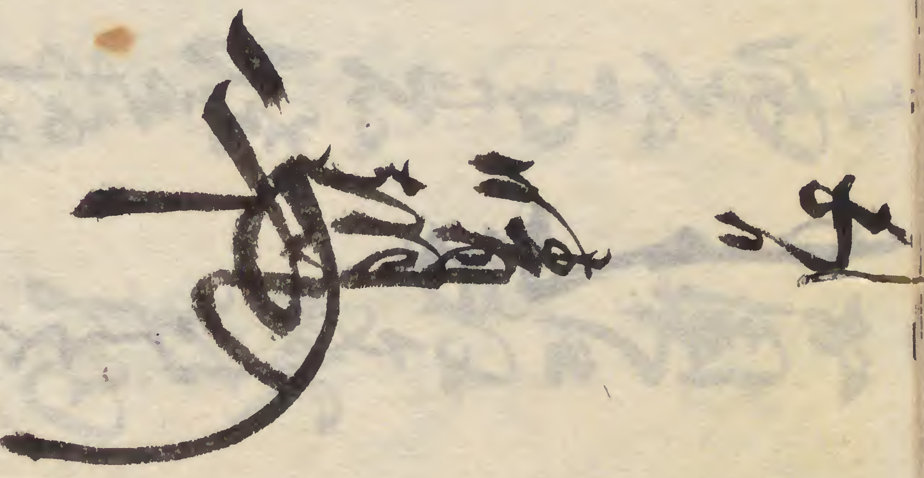
大里郡 太田村 戸凡二百三十六 水戸迄五里十丁

此村西ハ稲木ニ隔ツ、南ハ磯部、東ハ三才・西宮村、北ハ高場・新宿ナリ。南北廿三町八間、東西十二町。五十戸所と云。水戸より相倉への往来路ニ當て、倭名抄ニ見へたる太田ニ郷是なるへし。

或云太田今在所也、所地ニ名代も未詳

本據 太田ハ入道の城也と云。若くハ倭名抄の太田ニ郷也なるへし

古跡 佐竹城 上田ニ見、関東の賊を討ける時築と又云藤原秀郷六代孫通延萬寿中ここに来り城を構へ住る事、太田太夫と称し、後佐竹冠者昌義延文中築と云ふ。近世佐竹氏代々のよりハ常陸国志ニ詳なり 鶴



此池ハ秘事なり八武人の説に鶴云々是八幡を迂て時有
鶴といへる女来て池中に安置せしよりさる郡[illegible]此池を名付
といへり今此村に社人豊田氏なるものゝ宅則前鶴の子
孫なりといへり今ハ戸塚旅館にあり又此地に稀花
なり村用に称名なり

七井　柳の井（本湯にあり）　絞ヶ井（の傍にあり）　十王井（十王堂にあり）　下井（下井戸にあり）
金井（金井下にあり）　観花井　一名ハおれ又ハ茶水ともいへりむかし此
戸塚の茶水と成りし所若井しといへ古内田知ニあり　茶
岸妙寺（観音寺）　是を七井と称せといへり古跡ニなりしと茶名
清水とくみにきて何を綾川の名をなり何人の歌
なるや知らず　一名清水ニて駒留の井とも云て　紫氏
居住のころハ銀ヶ水とも云しとなり

古文書四通　右同氏伊に有るもの和名なり今ハ其本書を失
其写をぞ傳ふ

然今啓春で御佳例之武運
長久之清珍奏聊不存疎意之
輪毛之書翰再不残之ニ
将又於此方相尾石之趣ニ候之
自然各度之御礼哉好機之
一両月様之事必㊞陣候可
清様御手気可被成候

一 従之 十一月廿六日 收室図

藩之江戸但馬守殿

名御当所

去ル十九日御殿毎御所より被仰之
通り被仰候旨被成候儀右之者相願候
御沙汰被遊候ニ付可有之哉御問合
秋中御上洛被為在候ニ付無之
無之右ニ付被遊候儀被成候以
御書中可申上候頼被下候
将之御取計被成候不残相済仕

御作事之義ハ隆右講律之節候
如様之手延候而表方相願候ハ相
福寿院中へ合候者ハ有難以上
謹言

十月九日　妙宣（花押）

不染録
御前和

態令啓上候然者此度出来遊而
謹得之清説切之候得共思召之趣
御風聞被仰候ニ付御出来一通持
出苦労存候之候間右談合相済
日限之儀別段之立会中物書
回候事ニ付仰付之様之ニ付能相
請取候之候ニ付先以思召之通候
難有存候者於仰付候ハ御取院
其内ニ而も元被之御指図可給

将又伏見来条猶令入魂候
識者候沈ニ相心得可申候条
不能詳候恐々謹言

十月廿日　栄賀（花押）

吉備中後守殿
　　貴答(?)

然ハ旧冬於東表ニ
殿下去年遠征(?)御出馬之由
尤事ニ候御座所相移之
御在京候留守中之段苦労
乃至事共可申入候仍此一段旦(?)滞
殿下此九一(?)中宮可受(?)御出
候処春(?)早成ニ被思召成候
此紙御添(?)伏見来三條

今度於京都誠表使請出處之
中納言家照墨謹之
十月廿日　某（花押）
大澤備前守殿
右府御和

太田郷
新宿村　水戸より三十町
此村西は山岸に添　太平村に続き　南は稲木太田村　東は馬場村　北は
坂井村に接す　南北十丁　十五六間　東西八丁　四五十間にすぎず
太田の宿新宿村と並びしものなり
西山　水戸義公の隠棲し給ひし所なり　今義公の肖像
を安置し給ひて其堂を守らしむ　楽門の前に庵室を建て
生前にあらはし置き給ひし物をおさめて有
桃源橋　太田より西山への路の辺の田野千の千樹の野桃植て桃花
うるはしく存けり
不老沢　義公西山に隠居し給ひし時　従臣の者に名付給ひし所　不老

次ニの名付るひしあり

大里郷　稲木村　戸凡七十三　水戸迄五里

此村西ハ下山あり北ハ新宿ヲ隔て西ハ大里三郎林南ハ若海ニ
東ハ城部三田村ニ至ル東宿十丁隔て南ハ十七丁二十間隔て河
ヨ西宗寺州泥ヨ天雲寺開山将曽ハ当且郎ハ稲木宮内大輔
義繁と見へたり　按系図佐竹貞義ハ弟義行稲木三郎と称
ス義繁ハ義行の玄孫ナリ　又按大掾系図ニ義行ハ子幹定
弟ナ四丁西ハ稲木ニ亦死と見へたり何の誠なるやを知ラス

大里郷　天神林村　戸凡百三十　水戸迄五里

此村ハ山へ隔て西ハ若田ニ隔て南ハ若田谷ニ本村東ハ稲木村ニ

八重村より東ハ宇壽寺二十間隔て南ハ三子四尺ヲ隔ツ　傳ニ名
ハ佐竹に仕ヘ七代天神の祠あり村名よりて名付しと云へ
たり　土人初ハ菅神祠と為りまりしと水戸人義公正しふ
額ニ後ニ自ら七代天神宮の額を書し掲ケらる

古城　佐竹太祖の城なり　又見と馬坂の城と云　中書編年図
をみへたり　佐竹氏世系　新羅三郎義光長子義業常陸
大掾清幹の女を娶て二子を生む　長子昌義　次男氏常
陸の人となり　父為邦　佐竹比三郎　林ニ於て城を構て　図ニ子　佐竹
と氏を名乗る　坂戸因ニ稲をいふ　又文永の比　佐竹義俊ニ男二子
三郎義成ニ隔て　林三郎　林氏　其子上總守義吉其子三郎

寺記と云寄帳記ニ有り天文慶長寛永宮林内ニ在
りし唐様仏像ニ石碑の名有りしとぞ今其名不詳

古墳

姫塚と云ふ地ニ塚有大ナル三ツの塚あり古しく塚を
以ふ三ツの塚とハ云ふ地云々昔何人の墓なるやを知らず

六里餘　赤土村　家数　戸凡百二十一　水戸ヨリ八里

此村四面ニ山有り東ハ西塚中塚和久ニ隣り北ハ天下野大雷河
内西ハ下高倉南ハ根谷上利員ニ隣る東西三里南北
一里十二丁許也此村煙草を産し近在の名物なり高倉
河内ニ出る此内根谷赤土煙草と称す

七里餘　根谷村　家数　戸凡四十　水戸ヨリ七里

此村四面ニ山有り西ハ上利員中利員ニ接し南ハ千々松平村
東ハ和久国安村北ハ赤土村ニ接す東西三十一丁許南北四丁ニ
過ぎず此村根と云川小路に通す高倉郷の内文白木茨谷
竹麻蒟根ニ有り赤土根谷千々利員中利員の山中ニ出

六里餘　千手村　家数　戸凡三十七　水戸ヨリ七里

此村東西北山有り西ハ中利員下利員ニ接し南ハ岩手東
ハ東連寺松平北ハ根谷村ニ有り南北二十丁許東西八丁ほ
と也年代…を判読し云々

圖書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan